

千本松原く仮説・日向松の由来

― 歴史を訪ねる旅 (12) ―

下土橋 渡



昔の濃尾平野は木曾・長良・揖斐の三大川が乱流していて、大雨のたびに、現在の岐阜県大垣市墨俣町より南の地域は、一本の川になって氾濫し、地域住民はこの自然の威力にただただ逃げまどうばかりでした。これに対して幕府は、大規模な治水工事を計画し、当時幕府につぐ強大な力を持っていた薩摩藩に藩の財力を弱めるため、その工事を命じました。これが『宝暦の治水工事』でした。この工事で薩摩藩は、30万両の大金と多くの犠牲者を出し、幕府役人の圧迫と病に苦しめられながら、血と涙と汗で見事に完成させま

した。総奉行平田鞠負は工事中に51名の割腹者と33名の病死者を出し、多額の費用を費やした責任を負い、大牧の本陣(元小屋)で宝暦五年五月二十五日割腹し果てました。時に52才。今日、西濃地方が順調な発展を続けていられるのも、こうした先人の偉業のたまものであります(以上、治水神社境内の『宝暦治水工事のあらすじ』より)。

著者が宝暦の治水工事由来の地である治水神社と千本松原を初めて訪ねたのは二〇〇七年六月のことでした。

木曾三川公園センター内にある高さ65メートルの展望タワーから眺めれば、南に一キロメートルにわたって千本松原の松並木がのび、右に揖斐川、左に長良川、さらにわずかながら左端に木曾川が見える光景はまことに雄大そのものでした。展望タワーを降りて千本松原の松林に入ると、樹齢250年余の

松の木は一人では抱きかかえられない程の幹回りの太さで、堂々とした風情があります。

木曾三川公園センターのすぐ下には、総奉行平田鞞負を祭神とする治水神社があります。正面に大きな丸に十の字の島津家の家紋が掲げられているので、てっきり、薩摩藩（島津家）によって創建されたのだろうと思いましたが、地元の人々の浄財によって、昭和2年（一九二七年）に起工し、10年の歳月を経て建立されたものだという事です。工事の犠牲者となった薩摩藩士80余名も境内にある治水観音堂に祭られていて、毎年、春と秋には義士の遺徳を偲び、慰霊祭が行われ、鹿児島からも多数の参加者があるそうです。治水神社の境内には薩摩鶏と思われる鶏が遊んでいました。

宝暦の治水工事で薩摩藩士たちによって、

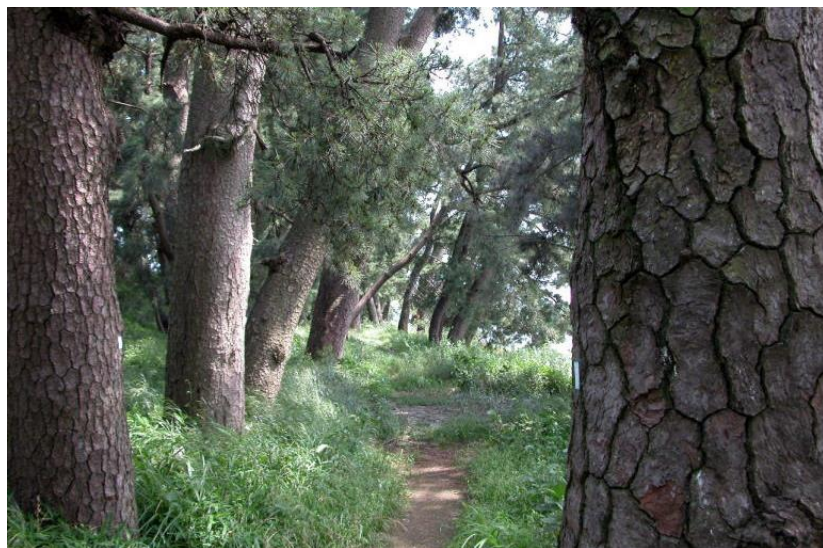
揖斐川と長良川を仕切る背割堤が油島（現在の岐阜県海津市油島）に完成したのは、宝暦5年（一七五五年）3月27日のことでした。

この日から、総奉行平田鞞負が書面で国許へ治水工事の完了報告を行なった同年5月24日までの間、薩摩藩士たちは、出来上がった背割堤に約1キロメートル余りにわたって千本の松を植えました。今日、千本松原と呼ばれている松並木です。

薩摩藩士たちが、油島の背割堤に植えた松は、日向松でした。日向松は文字通り、宮崎県産の松です。千キロメートル以上隔てた岐阜と南九州を歩き来するには当時の交通手段では、片道25日間、往復50日ぐらいの日時を要したと思われます。松苗なら美濃地方でも調達できたはずなのに、資金が底を突き一両の余裕も無かった中で、わざわざ駄賃を使つて何ゆえ遠方から松の苗を運んだのか、



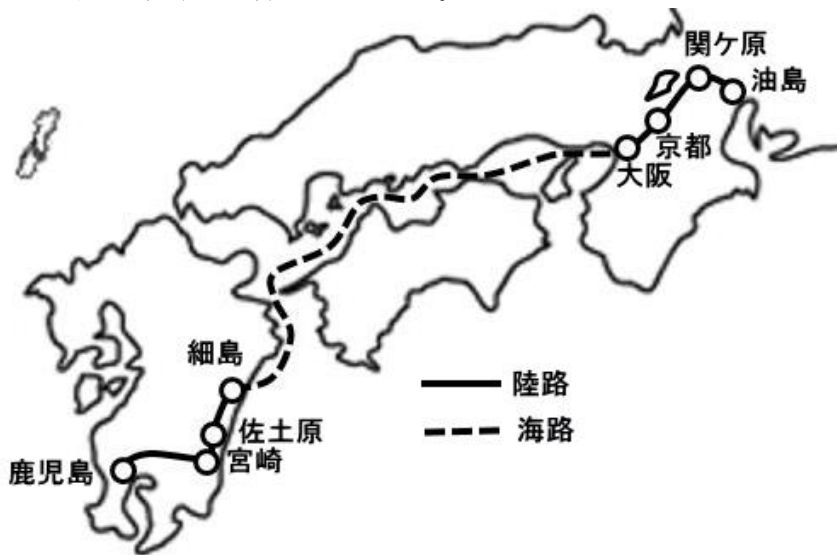
木曽三川公園センターの展望タワーからの眺望。中央が千本松原。右が揖斐川、左が長良川、左端にわずかに見えるのが木曽川。



千本松原の堂々とした風情のある樹齢250年余の日向松



総奉行平田靱負を祭神とする治水神社。地元の人々の浄財によって昭和13年（1938年）に建立された。



海路を利用した薩摩～美濃間のルート

そして薩摩の松ではなくなぜ日向の松だったのか。疑問が残りますが、そのことに触れた文献やサイトは見当たりません。ただ一つ、小説『霧の木曾三川淵―薩摩義士の血と汗と涙の物語』（ジェイボックス、一九九九年八月初版）の著者・瀬戸口良弘氏が、『霧の木曾三川淵』こぼれ話　く取材ノートからく『第四話・千本松原の由来』と題する記事を二〇〇七年当時インターネットに掲載されていました。しかし、この記事もまもなく削除されました。しかし、この記事もまもなく削除され現在ではみることができません。削除の理由は、おそらく、瀬戸口氏の想像された一つの仮説だったからだということではないでしょうか。そのことを了承頂いたうえで、瀬戸口氏の仮説を紹介します。

瀬戸口氏は、幕府の役人が『薩摩より松苗を持参致して植林を致せ』と下命したのに違いないと考え、以下のように推測します。

当時美濃から薩摩に行くには、陸路を徒歩で関ヶ原く滋賀く京都を経て大阪に行き、大阪からは船（帆船）で細島港（現在の宮崎県日向市）着、細島から再び陸路を徒歩で、西都く都城く国分く鹿児島着の道順がありました。松苗を採取しに国許に向った小奉行ら一行は、大阪から細島港に到着すると、佐土原藩（現宮崎市）国家老の屋敷に宿泊することになり、思い切って松苗のことを相談しました。

島津藩とは親戚筋に当る佐土原藩は、今回の美濃の治水工事の下命を気の毒に思っている矢先でもありました。すでに時間的余裕はない、しかも資金も底を突いている状況を察した佐土原藩国家老は、佐土原藩士に命じて細島港までの道中の道端に自生している山苗を採取させ、細島港より桑名城下の『七里の渡』に直接船で運ばせたというのです。薩摩

藩士たちは、届いた松をホロホロと泣きながら植林しました。

宝暦治水工事から250余年。樹齢250余年の日向松は堂々とした風情で佇んでいます。鹿兒島県の有志から松くい虫に強いクロマツの苗木の提供や駆除経費の支援があるなど、鹿兒島県の有志とも協力しあつて千本松原の保護の取り組みがなされています。

また、治水神社の境内の一角に松の苗を育てている花壇があつて、『ぼくたちは、平成15年ここに千本松原の松ポックリより生まれた二世松（253年前の子孫）です。兄弟そろつて、元気に、この地で生きています。りっぱな松に育つように見守って下さい。木曾三川千本松原を愛する会』とありました。

（元九州職業能力開発大学校教授）



刀を鋤に持ち替えて～薩摩義士像（治水神社内）